研究ノート

ニューギニア高地のインボング族　第2回

ニューギニア高地における近代貨幣経済の導入

塩田光喜

はじめに
I　外来文明との出会い
II　近代貨幣導入の背景
III　近代経済システムへの統合
IV　高地民によるコーヒー生産の開始
V　貝貨から貨幣へ
VI　二つの交易ネットワークと“bisnis”

はじめに

換金作物であるコーヒーがどのようにして今のように，ニューギニア高地の日常に溶けこんでいったのか，さらに，一体貨幣はどのようにして新石器社会の中に入りこんでいき，定着していったのか，が本稿で検討する課題である。この分野は従来，政治経済学（political economy）の占有分野であるかのように扱われてきたが，そのため貨幣の存在しない所に貨幣が入りこむということの，文明史的意義に関する問題関心がいささか稀薄であったように思われる。事実，ニューギニア高地人にとってそれは大事件であった。白人が貨幣を導入しようとして十数年間，その受容は遅々として進まなかった，ところがある時期急に目ざめたかのように，貨幣に対する熱狂がニューギニア高地を席捲したのである。本稿は，その過程とそれがもっていた歴史的経緯と背景に考察を加えながら提示しようとするものである。

私は，1985年から87年にかけてサザンハイランズ州（Southern Highlands Province）のインボング族の地（イアリブ地域のアンブプル村）でフィールドワークを行なった。本稿の対象となる1985年以前のできごとについては伝聞と白人たちの手になる記録に基づいている。白人たちの記録はインボング族以外の他の民族についての記録も多く含まれている。なかでも，この分野における先駆的業績であるフィニー（Ben Finney）の著作には，大きく依拠している。範囲をインボング族ではなく，ニューギニア高地にしたのは，貨幣の浸透と換金作物の歴史をインボング族だけに限定していては見はるかすことができないからであり，パプアニューギニア（以下 PNG）全体に広げなかったのは，ニューギニア高地の貨幣経済は PNG の他地域とは異なる独特の歴史を持っているからである。新石器の基層文化についても同様であり，私自身ニューギニア高地民ならばインボング族以外の民族であっても，できごととその原因や帰結を大略想い描いて過たないといえるが，他地域について同じ程度にそうはいえない。ここで，ニューギニア高地とは，PNG のイースタンハイランズ，チンブー，ウェスタンハイランズ，エンガ，サザンハイランズの5州の標高1200㍍以上の地域を指す。高地5州は PNG の4地域区分の1つを成し，PNG の全人口中，約4割を擁する地理的にも，社会的にも，文字どおり，PNG のバックボーンを成す空間である。

『アジア経済』XXX-6（1989. 6）

I　外来文明との出会い

20世紀に入ってもなお外の世界から離れ，ひとり新石器時代のなかにあったニューギニア高地を最初に外界へ向けて開く第一歩をしるしたのは金鉱を求めて1930年に高地に足を踏み入れた2人のオーストラリア人，マイケル・リーヒー（Michael Leahy）とマイケル・ドワイヤー（Michael Dwyer）であった(注1)。オーストラリアの国際連盟委任統治下のニューギニアは当時，ブロロ（Bulolo）金鉱が発見され，ゴールドラッシュの只中にあった。大手の金鉱採掘会社ニューギニア・ゴールドフィールズ（New Guinea Goldfields）社はさらなる宝の山を求めて，2人を未踏の土地へ金鉱探査に派遣したのである。

2人の前に，それまでほとんど無人の山岳地帯と考えられてきたニューギニア高地が，稠密な人口を擁する農耕社会として姿を現わしたのである。

リーヒーは，1932年，今度は弟ダニエル・リーヒー（Daniel Leahy）を伴ってニューギニア・ゴールドフィールズ社の資金の下にニューギニア高地に入り，ベナベナ（Bena Bena）の地にベースキャンプと滑走路を開いた(注2)。以後，統治府，教会，入植者を問わず，白人たちがニューギニア高地の新たな土地へ乗り出していく時，そこには常にこのベースキャンプと滑走路の組合せが見られることになる。

とりわけ重要なのは滑走路である。何百キロメートルにもわたる部厚い熱帯雨林と峻険な山々によって阻まれたニューギニア高地に白人が初めて足を踏み入れた時，それは探険の部類に属する行為であった。探険を超えて，ニューギニア高地で生活を始めようとする時，人も物も道なき道を歩いてゆかねばならず，海岸地方から人員と物資の補給を行ないうるような交通路はどこにもなかったのである。チャールズ・リンドバーグがニューヨーク・パリ間無着陸飛行を行なったのは1927年5月のことである(注3)。つまり当時の航空機では長距離飛行はまだセンセーショナルな冒険行為だったのである。山岳地への飛行は，その不安定な気象条件から，それに劣らず困難なものであったはずである。航空技術の発達によって物資空輸の商業化がようやく始まったばかりの時代であった。この技術上の進歩がなければ，単なる探険を超えたニューギニア高地への白人の入植はおそらく不可能であったに違いない。ニューギニア高地の白人統治史は最新のテクノロジー，航空技術の上に乗って推し進められたのである。

1933年3月，マイケルとダニエルのリーヒー兄弟は再度ニューギニア・ゴールドフィールズ社を説得し，その資金によってベナベナから西の金鉱探査を企てた(注4)。ニューギニア・ゴールドフィールズ社からは測量技士のケン・スピンクス（Ken Spinks）が同行し，さらにベナベナ地域をパトロールにやってきてリーヒー兄弟と出会ったニューギニア委任統治府のパトロールオフィサー，ジム・テイラー（Jim Taylor）が統治府本部を説きふせ，リーヒーらと行をともにすることとなった(注5)。

この時，リーヒーたちは探査に先立って探査ルートの目安をつけるため2度にわたって飛行機を検分飛行に送り出している(注6)。一行はさらに，出発直前，到達地点に滑走路をつくり，そこでパイロットに合図の狼煙をあげて待つ手はずを定めた(注7)。

隊は3月28日，合わせて82人にものぼる現地人

を荷物かつぎや道案内としてひきつれ，さらにテイラーのニューギニア人警官を伴ってベナベナを出発し，早くも4月7日にはワーギ（Wahgi）盆地に達し，簡易滑走路をつくり，4月10日打ち合せどおりギニア・エア・ウェイズ社（Guinea Air Ways）のフォックス・モスU.V.機が約230瓩の荷を積んで着陸した(注8)。一行が10月にベナベナのベースキャンプへ帰るまで，2週間または1カ月に1度の割合で飛行機による物資補給が行なわれた(注9)。

飛行機による物資輸送はオーストラリア人のニューギニア高地入植の生命線だったのである（ちなみに，ギニア・エア・ウェイズ社は当時，商業荷物空輸としては世界最大の運送量を誇っていた)。これは海岸部からニューギニア高地に本格的な車両用全天候道路が通じた1962年まで基本的に変わることのない状況であった。

どのような経済システムもそれが載るべき交通体系がどのように展開しているか，それがどの程度の物資の量を，どの程度のスピードで，そして，どの程度のコストで運べるのかに根本的に依存している。新石器時代のニューギニア高地には，村のなかの，あるいは村から村へ時に途切れながら細々と続いていく踏み分け道や人1人が渡れるだけの蔦の橋が唯一の交通路であり，交通機関としては人の脚があるばかりであった。

白人たちはその只中へ，ベースキャンプと滑走路の離れ小島をつくり，空路を通じて産業社会と結ばれることによって，活動を周りに広げていったのである。

そして，白人が接触した高地人たちと最初に行なった活動が交易であった(注10)。

リーヒーの最初の探険行から白人たちのパトロールや入植に際して慣行となったのは食糧はできるだけ現地で，交易によって手に入れるという方針であった(注11)。それによって高価な空輸運賃を節約し，探査の際に連れていく荷物運びの数を抑えることができるからである。前述のように1933年の高地横断探査においては白人4人に対して，荷物運びとニューギニア人警官を合わせると82人という規模に膨れ上がった。食糧を現地調達してすらこの規模なのである。

そして食糧を現地調達したり，滑走路をつくるための人夫仕事に雇うために，白人たちは貝貨を用いた(注12)。

ニューギニアや島嶼メラネシアにおいては，形を整えた美しい貝の殻が非常に珍重され，経済的交易や社会的贈与交換を通して流通していた。ニューギニア高地もその例外ではない。海岸から何百粁も離れた海抜1000㍍以上の高地において，海岸から長い交易の旅を経て運ばれてきた美しいさまざまな種類の貝の殻が男たちの胸を美々しく飾ったのである。

白人たちはすでに統治を確立していた海岸地域において，こうした貝の殻をふんだんに手に入れることができた。

ワーギ河谷盆地では1930年代の半ば頃，海岸で25㌢で手に入る1枚のベイラー貝（bailer shell。Melo amphorc，ヤシガイ属）で重さ70瓩ほどもあるブタを1頭，同じく25㌢相当のカウリー貝（cowrie shell。Cypraea moneta，ヤシガイ属)やナッサ貝（nassa shell。Mrginella，ムシロガイ属)で1㌧ものサツマイモを買うことができたという(注13)。

しかし，白人たちが濡れ手で粟の取引をしていたと言えるなら，現地人もまた白人の気前のよさと馬鹿さ加減にあきれていたのである。

たとえばベナベナ・ベースキャンプの東方を居とするシアネ（Siane）族はどうして白人たちがこ

んなに貴い貝をサツマイモのような「ただ同然のもの」と取り換えたりするのかいぶかしがった(注14)。

というのは，ニューギニア高地の諸社会では，財の身分制度とでもいうべきものが存在し，異なった階層に属する財同士は通常交換の対象とはならなかった。そして貝貨やブタのような貴重な宝は本来，身分の低い畑作物と交換することはできなかったのである。貝貨は海岸地帯から遠く広大なジャングルと峻険な山塊とによって隔てられた高地民にとってはめったに供給されることのない稀少で，目の玉の飛び出るほど，貴重な宝だったのである。それゆえ貝貨に対してサツマイモや野菜などで値段のつけようもなかったのである。ところが白人たちは貴い貝の殻を惜しげもなくサツマイモのようなものを手に入れるために使い始めた。

つまり白人側も，高地人たちも，ただ同然のもので驚くほどの価値をもつものを相手が渡してくれると思っていたのである。

そのようなニューギニア高地人にとってオーストラリア紙幣は何の価値もないものであった。1940年代になっても状況はなお次のようなものであった。「ゴロカ（Goroka）人(注15)の圧倒的多数はかねの使い方を知らず，彼らの提供する食物と労働とにかねではなく交易品による支払いを望んだ」(注16)。

それは決してニューギニア高地人が欲を知らず，かねに汚されていない無垢な民であったからではなく，テイラーも言うように貨幣を支えるシステムを知らず，それゆえ貨幣のなかに価値を見出すことができなかったからである。

とまれ，白人と接触した者には貴重な宝が流れこんできた。

その結果，ニューギニア高地の新石器社会は空前の大好況に沸いた。リーヒーらがワーギ河谷に足を踏み入れた直後に，宣教のため，現地に居を定めたカトリック教会のロス(Ross)神父は次のように語っている。

「何千というこれらの貝は白人の占領下の10年間にこの地方一帯に散らばっていった。結果，ハーゲン(Hagen)(注17)地方の原住民は百万長者となった。男たちは貝を手に周辺の地域におもむき，徐々に貯めこんでおいた貝で妻を手に入れた。かつては，長(おさ)は3人も妻がいれば大したものだったが，今では8人でも10人でも買うことができる。かつては何の地位も持っていなかった若い男たちが今では白人たちのために働いて貝の支払いを受けとることによって地位を向上させることができるようになった。今日では，各部族ごとに何百というゴールド・リップ貝（gold lip shell。Pinctada margaritifera Lightfoot，アコヤガイ属，クロチョウガイ――引用者）がある……」(注18)。

村々の間に風土の一部として支配していた恒常的敵対関係がオーストラリア委任統治府の手によって鎮定された結果もたらされた平和とあいまって貝貨の流通は一挙に加速・拡大した。

ニューギニア高地人はこの激増した貝貨を村々の間で競い合うように催される儀式に振り向けることによって回転させた。

マウントハーゲン（Mt. Hagen）地域で以前は村と村との和解・同盟締結のための儀式であったモガ（moga。モカともいう）儀式は白人による戦争の禁圧以降，安全保障のための意義を失って自己目的化し，儀式を主催する村やクラン，またそれを率いる有力者が威信と名声を競うための舞台となった。ロス神父は1940年代のモガ儀式について次のように述べている。

「モガの与え手は貝やブタを全き贈与として相手に与える。しかし，それは，同様にして相手方から後に

お返しがされねばならない。換言すれば，ある男がモガにおいて8個のゴールド・リップ貝を与えたならば，少なくとも8個をお返しに受け取ることになる。もし，8頭のブタを与えれば，8頭のブタを受け取る」(注19)。

私が住みこんでいた地のインボング族はマウントハーゲン地域のメルパ(Melpa)族とは多くの文化要素を共有し，同様の儀式がマガリと呼ばれているが，ロス神父の述べるモガの原則は，そのまま現在，今日でも妥当する。ただ1点を除いて。

その1点とは，倍返しの原則である。8頭のブタを与えられた者は16頭にして返すべきであると人々は言う(注20)。

ロスの記述と私の見聞の間の食い違いはロスの住んでいたマウントハーゲン地域とインボング族の間の文化的差異というよりも，ロスの見た1930年代の状況と私のすごした85～87年の間の時間のもたらしたものではないかと私は思う。その間には白人到来によってもたらされた未曽有の大好況が起こっている。貝貨は年を追ってふんだんに流入を続け，しかしニューギニア高地から流出することも摩耗することもなく，ただひたすら貯まり続けていく。人々の間には，時間がたてばたつほど富の量は増大していくという期待が定着していく。おそらく，倍返しの原則はこのような成長神話に支えられて出現したのではないかと思われる。

このような事態のもとにおいてわれわれが予想することは貝貨のインフレーションと評価の低落である。しかし，ニューギニア高地においては貝貨の急激な膨張に対応するだけの評価の低落は見られなかった。ロスによれば，白人が1枚の貝貨で買えるブタのサイズは後に小さくなったというが，貝貨の爆発的増大に見合うほどの評価の低落ではない。

この特異性は石斧と較べ合わせてみる時，より一層鮮明に浮かびあがってくる。

ニューギニア高地の新石器社会はその名の示すとおり，根幹となる生産用具および武器としての石斧の上に築かれていた。しかし，石ならばどのような種類の石でも，石斧の原料となれるわけではない。それは薄片にはがすことができ，しかも，衝撃に強い特殊な粘板岩からのみつくり出すことができる。そしてそのような石を産出する土地はジミ(Jimi)河谷などニューギニア全土でもほんの数カ所に限られており，ニューギニア高地諸族のほとんど全ては交易によってしか石斧を手に入れることができなかった(注21)。石斧もまた貝貨同様，稀少で大切なものであり，めったに新しく入手できないため，父から息子へと大切に相続されたのである。

白人は貝貨と並んで交易品として鉄斧をも用い，それはやはりニューギニア高地諸社会のなかにせきを切って流入した。その結果鉄斧は石斧を駆逐し，鉄斧が一わたり男たちのなかにいきわたってしまうと石斧は貴重品としての性格をすみやかに失い，それに代わった鉄斧は単なる道具の一つ以上に出ることはなかった(注22)。

貝貨はそうはならなかった。なぜ，貝貨と石斧は同じ状況の下で異なった運命を歩んだのか。私は次のように考える。

ニューギニア高地人は価値実体論の立場に立っていたように思われる(そして今でもなおそうである)。価値は価値を宿す特定の物財のうちに内在するのであって，財の間の相対的関係の表現，たとえば諸財の限界効用の均衡点における交換比率のことではない。むしろ価値はそういった効用から超越した平面に成立しているある絶対的なもの

である。そうした絶対的価値を内在させる選ばれた財貨，たとえば貝貨に含まれる価値は，貝貨の数がどんなに増えようと不変である。ニューギニア高地人はそのように思念していたように思われる。

価値のある物は，他のいかなる物との相対的関係にも揺がされぬそれ自体絶対不変の価値をもち，価値のない物は，いくら加算していっても価値は生じない。先に述べた財の身分的秩序はこの絶対価値内在論の立場から自然に導き出される帰結である。

効用によって貴重であった石斧は貴重品の地位を失い，絶対的価値を内在させると見なされた貝貨はふえてもふえても，なお人々によって望まれたのである。ニューギニア高地は貝貨に対して無限の食欲をもつ胃袋のようにうむことなく吸収していった。

一方，石斧に対する鉄斧に相当するオーストラリア貨幣は一顧だにされなかった。

第2次大戦が終わると，オーストラリア信託統治府(注23)は，それまでの貝や斧による交易に換えて，貨幣を現地経済のなかに導入し，貨幣によって高地人との関係を形作る方針に転じた。1934年，リーヒーらとともにニューギニア高地における白人パイオニアとなり，第2次大戦後のニューギニア高地統治のための最高責任者として帰ってきたジム・テイラーがその政策の推進者であった。

テイラーはまず，県庁前にテーブルをすえ，さまざまの紙幣や硬貨を広げておき，そのうえにガラスを敷いて観覧できるようにした。そして，すでに貨幣経済の歴史が50年以上に及ぶ海岸地域出身のニューギニア人警官がその使い方を説明し，警官のための官給備品を買うのに使って見せた(注24)。

これは全く効果をもたらさなかった。

次にテイラーは，統治府の仕事に雇われた高地人に貨幣で賃金を払った。

すると何人かの男たちは「突然わっと泣き出し，かねを地面にたたきつけ，代わりに貝を出せ」と要求した(注25)。

テイラーは1947年暮れから48年初めにかけて，さらに2880オーストラリア・ドル（以下A$）を支払った。

しかし，ニューギニア高地人が貨幣をどう見ていたかはテイラー自身の語っている次のようなエピソードに端的に示される。それは，かねを渡されたチンブー（Chimbu）族の1人の男が白人に向かって「10シリング紙幣（1A$）を火のなかにほうりこむ真似をして，彼の貨幣に対する評価を示して見せた」(注26)，というのである。

貨幣が初めて大量に「使われた」のは1948年6月のことであった。

1947年7月，ニューギニア高地に利益活動を目的とした民間人が入植することを禁じた規定が解除された。1934年のリーヒーらの高地探査の後，ニューギニア高地に入ってきた金鉱採掘者や宣教師が相次いで殺害され，ニューギニア高地人も心ない一山組から被害を被ったことから，統治府が政府の官吏と許可を受けた宣教師およびリーヒー兄弟以外の白人が高地に入植することを禁止していたのである。

規制解除後まっ先にやってきたのが，マイケルとダニエルの兄であるジム（Jim）・リーヒーであった。彼はゴロカにコーヒー農園を拓くことを考えてやってきたのだが「土地をめぐる交渉をしている間に，ゴロカ飛行場のわきに小さな店を建て，ラエ（Lae）からのDC-3チャーター便で空輸され

てきた品物を積み上げた。この新事業はすぐに反応を呼び起こし，ゴロカ人たちは品物を求めて殺到し，貯めこんでいた貨幣で品物を買うために群がり集まった」(注27)。

ジムはこの1948年6月の5日間で品物を売りつくし，1016A^{ドル}が手元に残った。彼はすぐに次の便をチャーターし，今度は1日で1024A^{ドル}相当の品物をすべて売りつくした(注28)。

こうしてニューギニア高地人は有史以来初めて貨幣で商品を「買った」のである。

しかし，私には，実際は，テイラーが高地人に前もって支払っていた貨幣が，高地人たちに貨幣というより一種の手形として受けとられていた，すなわち本来なら交易品で支払うべきものの代わりに将来交易品によって落とされるという期待のもとに配られたティケットとして高地人たちには了解されていたのではないかと思われる。なぜならリーヒーの商品は大半が「鉄斧その他の金属性の道具と貝」であったというからである。この商品リストは元来の交易品の顔ぶれそのままである。また，テイラーの払った2880A^{ドル}のうちリーヒーの2回の売り尽くしで2040A^{ドル}が回収されたということは，人々が一刻も早く貨幣を手放して貝や鉄斧を手に入れようとしたという風に解しうる。これは，貨幣に対する熱狂よりも，貨幣の価値に対する不信を物語っているように，私には思われるのである。

その証拠に，「1950年代に入ってかなり経てからもなお，貝やその他の交易品は通貨として用いることができ，とりわけ，ゴロカの県庁から離れた地域の住民や高地の他地域からゴロカ地域に流れこんできた農園労働者の多くは労賃に，貨幣よりも貝を望んだ」(注29)という。1930年代の後半から故郷を離れ，貨幣経済の歴史の長いニューギニア海岸地域で白人行政官のもとで働き，第2次大戦後，まだ交易品によって食物や労働の支払いがなされていた時，ただ1人貨幣を要求した当時ニューギニア高地随一の開明家で近代社会通であったアポ・ヤハリギエ（Apo Yaharigie）ですら，時に，白人に対してグリーン・スネイル貝（green snail shell。Turbo marmoratus，サザエ属のヤコウガイ）で払いをするよう頼まざるを得なかった。「妻たちが1940年代後半から50年代前半にかけてゴロカで非常に流行ったこの魅惑的な貝殻を切望したから」(注30)だという。

1958年になっても次のようなできごとが報告されている。

この年，マウントハーゲン地域のカウェガ(Kawelka)・クランの75人の男たちが一斉に100㌔以上も離れたゴロカへ向かって歩き出した(注31)。それはゴロカで賃仕事をして真珠母貝を手に入れるためであった。そのうちの1人の証言によれば「誰もがゴロカへ向かった。1人の男もうちに残らなかった。真珠母貝を手に入れようと皆は駆け去るようにしてゴロカへ向かっていった」(注32)。

結局，初めてニューギニア高地人が白人の店へ殺到してから10年たっても貨幣はまだ，人々から希求されてはいなかったのである。対して，貝貨はなお望まれ，ますます吸収されていき，評価が低落する気配はなかった。

（注1） Ashton, C., "The Leahy Family," James Griffin 編, *Papua New Guinea Portraits: The Expatriate Experience*, キャンベラ, Australian National University Press, 1978年, 174～175ページ参照。

（注2） 同上論文 177～178ページ。

（注3） Lindbergh, Charles A., *The Spirit of St. Louis*, ニューヨーク, Charles Scribner's Sons, 1953年（チャールズ・A・リンドバーグ著 佐藤亮一訳『翼よ，あれがパリの灯だ』上・下 東京 旺文社

1969年)。

(注4) Ashton, 前掲論文, 178～179ページ。

(注5) Mennis, Mary R., *Hagen Saga: The Story of Father William Ross, Pioneer American Missionary to Papua New Guinea*, with notes and articles by Father Ross, ボロコ〔ポートモレスビー〕, Institute of Papua New Guinea Studies, 1982年, 40ページ参照。

(注6) 同上書 41ページ参照。

(注7) 同上書 42ページ参照。

(注8) 同上書 41～42ページ, および Taylor, Jim L., "Patrol Report of 1933, Mr. J. L. Taylor, Purari River Headqauters Area" (タイプ・コピー), ポートモレスビー, National Archives of Papua New Guinea, 参照。

(注9) Gitlow, Abraham L., *Economics of the Mount Hagen Tribes, New Guinea* (第2版), シアトル, University of Washington Press, 1966年(第1版, 1947年), 8ページ参照。

(注10) 同上書 7ページ参照。

(注11) 同上。

(注12) 同上。

(注13) 同上書 77ページ, および Finney, Ben R., *Big-Men and Business: Entrepreneurship and Economic Growth in the New Guinea Highlands*, ホノルル, University Press of Hawaii, 1973年, 33ページ参照。貝の学名については Strathern, Andrew, *The Rope of Moka: Bigmen and Ceremonial Exchange in Mount Hagen, New Guinea*, ケンブリッジ, Cambridge University Press, 1971年, 102ページを参照。和名については谷津直秀・岡田弥一郎編集『岩波動物学辞典』東京 岩波書店 1935年／岡田要・瀧庸著者代表『原色動物大図鑑 第Ⅲ巻』東京 北隆館 1957年／平野信太郎著・瀧庸増補改訂『原色日本貝類図鑑』東京 丸善 1954年を参照。なお, 属名のみの呈示で種名を記していないものは上記の著作のなかに見出せなかったものである。貝体的に各々の貝の形状を知りたい場合は, Hinton, Alan, *Guide to Shells of Papua New Guinea*, ポートモレスビー, Robert Brown & Associates, 出版年次不詳を参照のこと。

(注14) Finney, 同上書, 32ページ。

(注15) ベナベナの近くの地名。委任統治領高地州の本部は後にここに移された。現在ではゴロカの町としてパプアニューギニア高地の東の中心である。ゴロカを中心とした周辺地域をゴロカ地域と呼ぶ。

(注16) Finney, 前掲書, 40ページ。

(注17) マウントハーゲンはパプアニューギニア高地の西の中心を成す町であり, 第1次大戦前, ドイツ人地理学者W・ベアマン (Behrmann) によって遠望され, ドイツ領ニューギニアの長官代理を務めたクルト・フォン・ハーゲン(Kurt von Hagen)にちなんで名づけられたハーゲン山の東麓盆地にあることからそう呼ばれる。以下, マウントハーゲンとは山の名ではなく町の名として用いていく。略してハーゲンと呼ぶこともある。以上, Vicedom, G. F.; H Tischner, *Die Mbowamb: Die Kultur der Hagenberg Stäname im Östlichen Zentral-Neu Guine*, ハンブルグ, Cram De Gruyter, 1943～48年, 第1巻参照。

(注18) Gitlow, 前掲書, 73ページ。

(注19) Mennis, 前掲書, 80ページ, および Strathern, 前掲書, 93～111ページを参照。

(注20) もちろんお返しがなされるのは10年以上たってのことであるが。

(注21) Hughes, Ian., "Stone Age Trade in the New Guinea Inland," Harold Brookfield 編, *The Pacific in Transition*, ロンドン, Edward Arnold, 1973年, 97～126ページを参照。

(注22) Finney, 前掲書, 35ページ。

(注23) 第2次大戦後, ニューギニアは戦前の国際連盟委任統治領から国際連合信託統治領に変わった。

(注24) Finney, 前掲書, 40ページ参照。

(注25) 同上。

(注26) 同上。

(注27) 同上書 41ページ参照。

(注28) 同上。

(注29) 同上書 42ページ, および Strathern, Marilyn, *No Money on Our Skins: Hagen Migrants in Port Moresby*, ポートモレスビー, Australian National University Press, 1975年を参照。

(注30) Finney, 前掲書, 42ページ参照。

(注31) Strathern M., 前掲書, 45ページ。

(注32) 同上書 52ページ。

II 近代貨幣導入の背景

さて，テイラーがニューギニア高地社会に貨幣を導入しようとしたのはいかなる背景のもとでであったろうか。

1930年代にニューギニア高地が外部世界に向けて開かれたことはすでに述べた。

しかし，それはきわめて限定されたものであった。すでに述べたようにニューギニア高地に入った白人たちと，未知のほとんど異星人ともいうべき白人たちを見た高地人たちの間で，あちこちに衝突が起こり，双方の側に死者をもたらしたため，リーヒー兄弟とすでに定着していた宣教師たちを特例として，以後，入植者の参入が禁止されたからである。この結果，プランテーションや採金業者や労務者たちの前に扉が閉され，高地社会はいったん民間人の経済活動に対して封印されることとなった。それが解かれるのは戦後1947年7月になってからのことであった。

入植者の参入禁止が民間人の活動を限定したとするなら統治府の活動もまたそれ自身の制約をひきずっていた。

第2次大戦前の委任統治領ニューギニアの経営に，オーストラリア本国政府は積極的に取り組もうとはせず，ほとんどなおざりにしていたということである。委任統治領ニューギニアの統治府はその予算を全て委任統治領内からの歳入で賄わねばならなかった。新たに発見されたニューギニア高地にさくことのできる予算はきわめて限られたものとなり，その予算と人員とでは数個の点を押さえる以上のことは実質的に不可能であった。

つまり，統治府も民間人もニューギニア高地を外部の自分たちの社会経済秩序に組みこむ力を欠いていたのである。

さらには，まずドイツのポーランド侵攻によるヨーロッパ大戦開始に対するオーストラリア兵の派遣，次いでオーストラリア本土そのものを目ざした日本軍によるニューギニアの海岸線への侵攻によって，統治の最前線を担ったパトロールオフィサーたちの軍への志願によって，ニューギニア高地の統治は一時中断された。

第2次大戦の南太平洋戦線はニューギニア海岸・島嶼地域の住民たちの前に，かつて見ない膨大な数の異邦人とその巨大な物量を展開した。かれらは激烈な戦闘と特に日本軍による過酷な統治によって激しい動揺を蒙ったが，戦場とならなかった高地は比較的微弱な影響を間接的に受けたにとどまった。とはいえ，編隊を組んで空を飛ぶ飛行部隊（時には爆弾も投下された）が白人たちを見たことのない地域の住民たちを恐慌に陥れたし，すでに戦前，ニューギニア高地統治の拠点として滑走路と駐留所（patrol post）のつくられていたゴロカとマウントハーゲンは連合国側空軍の反攻拠点として滑走路が拡大整備され，そこに多くの人員と物量が投入された。その結果，周りの地域住民を戦前の統治時代とは比べものにならぬほどの賃仕事と食物交易に投じ入れるなど，戦争はニューギニア高地にも荒れ狂う外部世界から波紋をもたらさずにはおかなかったのである。

1945年，ファシスト陣営は敗北し，世界に再び平和が訪れた。世界人権宣言に象徴される，第2次大戦の嵐によって一変した世界の思潮すなわち進歩主義と人道主義の無謬の正義としての確立，およびその全人類への普遍化，そしてそれに応じた旧植民地の独立の気運のなかで，オーストラリアに成立した労働党政権はPNGに対する戦前までの姿勢を急転回させ，パプアニューギニア人の

福祉と権利を積極的に促進する政策に乗り出した。

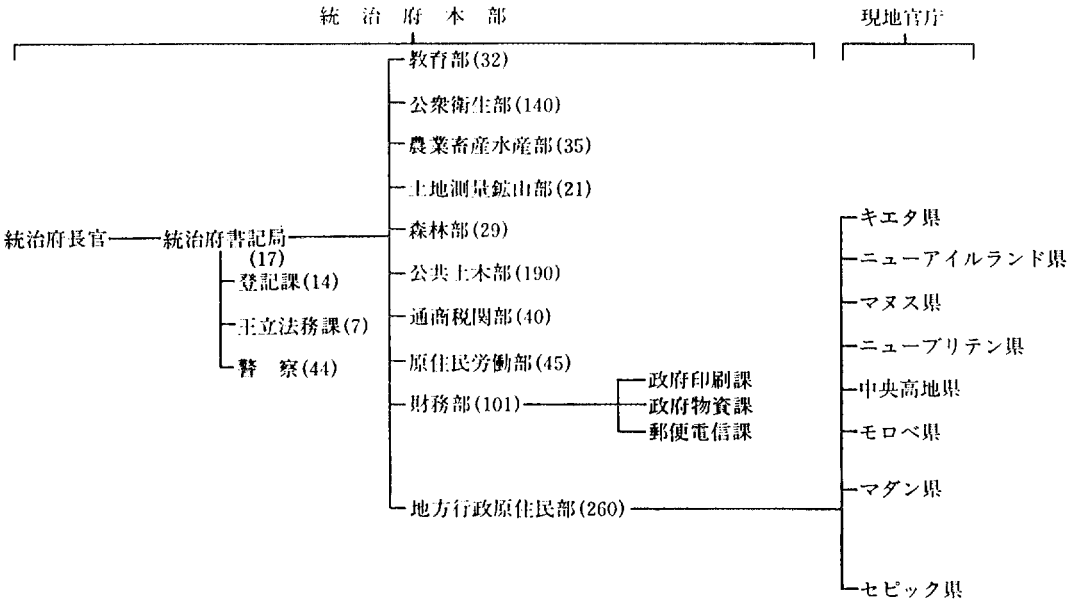
1946年のサンフランシスコ会議において労働党政権の外相イーヴァト（Evatt）は新たに成立した国際連合のもとでパプアとニューギニアを信託統治する条約に署名した。

それは「今後，全てのオーストラリアのニューギニア政策は『国連憲章76条（article）に従って，領土の状況に応じた形で，自治または独立に向けての進歩的発展』を指向せねばならない」(注1) 旨を義務づけるものであった。それが「ニューギニア領土に関する信託協約 1946年12月14日」(Australian Trusteeship Agreement for the Territory of New Guinea 14 Dec. 1946）の明確に指示するところであった。そして国連は3年ごとにその条項が遵守されているかどうかを視察する派遣団を送ることと定められ，オーストラリア政府は国連に毎年，統治の状況と進展を詳細に記した年次報告を送ることとなった。この国連視察団の勧告は，とりわけ1960年以降の独立化へ向けての状況の進展のうえに重要な役割を担うことになる。

第1図は，大戦直後のニューギニア臨時統治府の組織図である。

これは，原住民労働部が新たにつけ加えられたことを除けば，戦前のニューギニア統治府の組織構成をそのままひきついだものであった(注2)。当時，面積約30万平方㎞，人口約100万を擁する信託統治領ニューギニアは総勢976人の白人によって統治されていたのである。組織図中最大の人員を擁する地方行政原住民部が戦前・戦後を通じてニューギニア統治の最前線の現場でパプアニューギニア人統治の衝に当たっていた部局である。信託統治領ニューギニアは行政上，8つの県（district）に分けられ，各県には県令（district officer。後に県

第1図　ニューギニア臨時統治府組織図



（出所）Downs, Ian, *The Australian Trusteeship Papua New Guinea 1945—75*, キャンベラ, Australian Government Publishing Service, 1980年, 21～22ページ。
（注）かっこ内の数字は職員数。

知事〔district commissioner〕）が配され，県全体の統治の責任をおう。彼のもとに県は郡（sub-district）に分かれ，郡はさらにいくつかの駐留所に分けられ直接統治が行なわれる。統治現場でじかにニューギニア人たちに接触し，実際の統治を遂行していったのは県内に散らばる駐留所に配されたパトロールオフィサー，通称キャップ（kiap）と呼ばれた官吏たちであった。圧倒的多数の村人たちにとって，キャップは目にする唯一の白人であり，また彼らに直接影響を及ぼす唯一の白人であった。したがって，キャップが政府（ピジン英語でガブマン〔gavman〕）そのものであり，さらには白人世界そのものの代表であった。

たとえばイアリブ（Ialibu）駐留所を例にとれば，1953年には，1人のパトロールオフィサーと1人の見習いパトロールオフィサーによって約1万人の住民が統治されていた。イアリブ駐留所が設置されたのは1954年のことである。それ以前には，この地域は白人統治の外にあった。その当時まだ開かれたばかりの，したがって，大部分の土地が新石器時代のままの未平定地であったサザンハイランズ県では，県庁所在地と定められたメンディ（Mendi）からパトロールオフィサーたちが四方に向かって派遣され，彼らは先述のリーヒー，テイラーの探険を小型にした構成で（たとえば1953年3月から8月にかけての探険ではキャップ1人に，パプアニューギニア人(注3)警官10人，荷物運び平均25人，パプアニューギニア人医務看護員1人，現地人通訳1人というものであった)(注4) 道らしい道のないブッシュをキャンプを張りながら進んでいった。彼らの任務は行く先々で未接触の住民たちと接触し，その地域の地図をつくり，統治の拠点とする駐留所をどこに置くかを決めることにあった。イアリブはそのようにして置かれた駐留所の1つである。

駐留所を置くという行政的な言葉を事実に即していえば，キャップが起居する掘立小屋と部下のパプアニューギニア人警官，パプアニューギニア人医務看護員たちの寝る小屋を周りから切ってきた丸太とピッピッ（pitpit。かやのようなイネ科の植物）を使って建て，警官たちと周りの村から集めた人夫50人ほどを使って平担地の草を刈り，きれいにならして滑走路をつくるということである。これは，リーヒーやテイラーが初めて高地に現われた1930年代から変わることなく，白人の統治が新たな未開の地に及ぶごとにくり返されたことであった。新たな駐留所に赴任したパトロールオフィサーと見習いオフィサーは，ただこの滑走路と無線機と2週に1度メンディからマウントハーゲンへ遣わされる飛脚によって外の白人世界と繋がっていた。キャップたちの置かれた状況がいかに困難なものであったかは次の記述によってうかがい知ることができる。

「（イアリブ――引用者）ポストの設立は1953年3月にパトロールオフィサー，ロジャー・クラリッジ（Roger Claridge）によって始められた。彼は小さな滑走路をつくるのに何十カ月をも費した。これは喫緊の懸案だったのだ。パトロール一行はまず最初はテント生活，次いでは掘立て小屋のそれも最も粗末なものの中で暮らした。（中略）それは雄大で奇妙な格好のイアリブ山の横腹1900㍍の高さに位置するおそろしく寒い駐屯地であり，ニューギニアの多くの高原に常に見られる深く柔い湿地によって山から囲いこまれていた。クラリッジと部下たちは滑走路のまわりに深い排水溝を掘り，本格的な滑走路づくりの作業が始まるまで土が乾くのを待った。最初に飛行機が着陸したのはやっと1955年4月のことであり，莫大な量の労働が注ぎこまれたにもかかわらず飛行機（中略）は着地の際，軟泥につっかえて，尾部で地面をたたいた。そして，飛び立てるようになるまで，数日，冷たくべとつ

いたはえとり紙につかまった巨大な蝿のように身動きできないでいた。

イアリブは，今はパトロールオフィサー，トニー・キーオ（Tony Keogh）が若い見習のポール・コンロイ（Paul Conroy）を補佐役に取りしきっていた。（中略）2人はロジャー・クラリッジが建てた小屋に住んでいた。小屋といっても1人用の小さな部屋で，石と土でできた炉を中央に（あの厳しい土地では夜どんなに火を必要としたことか！）草と若木でふいた屋根と壁，そしてピッピッをしいた三和土が床であった。それはまるで中世の遺物のような代物であった。（中略）たるきの用を足している細い木の一つにかかっているワイヤーの先でジューッと音をたてている灯油圧力ランプが一つだけ。

（中略）

サザンハイランズの駐留所は県本部とは無線電信でつながっていた。（中略）イアリブには電源がなかった（というよりサザンハイランズではどこにもなかった）ので無線通信は電池か，（中略）小型の石油モーター充電器が頼りだった」(注5)。

このようなパトロールオフィサーは初めは見習いとしてオーストラリアの20歳以上の若い志願者たちのなかから選抜されていきなり未開地へと送りこまれるのだった(注6)。わずか20歳そこそこの若者は1人の先輩オフィサーとともに掘立小屋に起居し，時には数人ほどパプアニューギニア人警官を従がえ，数万人の新石器人のなかに白人の秩序を課しに出かける。文明の利便からは遠く離れ，初めの2年間は結婚して女性を伴うことも，現地の女と交際することも禁じられ，孤独で単調な禁欲生活をおくらねばならなかった(注7)。こうした生活を退官するまで何十年も続けていくにはきわめて特殊な資質と性向を持った人間でなければ不可能である。そして，こうした特異な素地を持ったキャップたちはそのなかで1つの独特な気質と精神を育んでいった。ニューギニア高地人が出会ったのはこのようにきわめて特殊なタイプの白人たちだったのである。そして，このことが信託統治下の，そして独立後のパプアニューギニア人の国民性が形成されるうえに及ぼした影響は決して小さくはなかった。

キャップはまた官僚制度のうえからみても非常に特異なポジションであった。それは信託統治府の官僚機構の末端官吏として近代的文書形式主義の厳格な統制下におかれると同時に，駐留所においては包括的な権限を一身に体現する半ば全能の統治者だったのである。

キャップは末端官吏としてはオーストラリア政府の定める信託統治領における諸規約に厳格に則って行動せねばならず，駐留所を維持していくうえでの収支決算を行ない，フォームに則った報告書を県庁本部に送るといった吏僚としての業務をこなさねばならなかった(注8)。

と同時に，駐留所の統轄者として彼は部下のパプアニューギニア人警官たちや医務看護人たちを管理・督励し，自分と部下たちの食料を周辺住民から買い入れ，駐留所の日々の生活を維持してゆかねばならなかった。

それらのことをこなしたうえで，さらに受持ちの地域の住人たちに対する統治活動を行なわねばならなかったのである。

キャップの統治行為は，まず村落間の絶えざる戦争を禁圧・停止し平和をもたらすこと，それに付随して警察活動を行ない，白人の法と秩序を守らしめること，そして復讐戦争という村落間の問題解決行為を抑止したことの代替として仲裁・調停を行ない，裁判を行なうこと，それらすべての行為を遂行するための巡回および緊急の移動に必要な4輪駆動車用の道路を敷設させること，巡回

活動を通して村ごとの人口調査を行ない，全ての住民を把握すること，便所づくりの指示，村民の集住化の指示を通しての衛生指導および疫病が発生すれば医務官とともに薬剤の投与を行なうこと，巡回において住民たちの要望や不満を聞き，可能なものは実行に移すことなどきわめて広い範囲に及んだ。事実上，キャップは立法権を除けば，司法・行政の全権を委ねられていたのである。実際，上述のような孤立状態においてはキャップの手に全責任を委ねることなしには実効的統治は不可能であったろう。

村の側から見れば，キャップの登場はまず村が持っていた政治的軍事的主権性を奪ったのである（ひきかえにキャップの下で保障された平和によって得た村内での安全や村外への移動の可能性は，キャップの指揮下に敷設されていった道路による空間編成の変化とともに，村人たちの生きる世界を大きく変えることとなった)。私が住みこんだアンブプル村の老人たちがキャップのことを想い出す時，まっさきに浮んでくるのは，キャップが村落同士の戦争を停止させるために巡回にきた時，銃を発射して見せたことにまつわるエピソードである。キャップは貝貨を払ってブタを買うと村人たちの見守るなか，銃を発射して屠ってみせた。突然，奇妙な杖が光を発し，雷鳴のようなとどろきを上げたのに驚愕した1人の村人は手にしていた斧を放り出し，斧の刃は隣に立っていた男の耳をそいでしまい，一座は先を争って逃げようと大混乱に陥った。おそらく，その瞬間，生きるために不可欠な貴重な石斧と同様，村の手から主権性は転がりおちてしまったのである。代わって，キャップの主権が確立した。彼我の優劣は一瞬にして決してしまった。キャップが銃を村人たちに向けて発射したのはニューギニア高地の全統治史を通してその初期に襲撃を受けた若干の場合に限られていた。むしろ上のエピソードにもあるように銃はその威力を人々に向けて示威するためにあったのである。事実，イアリブ駐留所のキャップの巡回報告書は統治の初期の段階において，銃を発射して見せることが行く先々の村で行なわれたことを記している。たとえば板を何枚か重ねて並べ，まず村人に矢を射かけさせて1枚しか貫いていないのを確かめたうえで銃を発射すると6枚の板がことごとく貫かれているといった風に。それで十分なのだった。以後，イアリブ地域で村人から襲撃を受けたという記述は1カ所も出てこない。老人たちの話のなかにもキャップから逃れようという事例はあるが，襲撃しようとした事例は見られない。雷を発する杖の最初の一撃によって，キャップの権威は速やかに受け容れられ，村と村の争いはキャップの所に持ちこまれ，その裁きが仰がれるようになった。

こうして始まったキャップの統治行為の一覧を見ればわかるように，キャップの統治の目的は彼らが人間のあるべき姿として考える秩序を人々に受け容れさせることにあり，村人たちからの収奪を行なうことには全く関与していない。戦後オーストラリアのニューギニア高地統治は経済的収奪を目的としたものではなかった。キャップたちにとって，そして県庁でのその上司たちにとって，またポートモレスビーのパプアニューギニア統治府本部においても，さらにオーストラリア本国政府においても目ざされていたものは帝国主義ではなく，未開の状態にあるニューギニア高地人を開化し，文明世界の一員とすること，だったのである。これはまさしく，先に述べた国連信託統治条約に明示されていたようにPNGに適切な形で「自治または独立に向けての進歩的発展」を進めるという主旨に，忠実に従うものであった。

ジム・テイラーがゴロカ地方に貨幣を導入しようとしたのは，この文明化という企図の一環だったのである。

（注1） Downs, Ian, *The Australian Trusteeship Papua New Guinea 1945—75*, キャンベラ, Australian Government Publishing Service, 1980年，3ページ参照。

（注2） 同上書 21ページ参照。

（注3） Claridge, R. M., "Mendi Patrol Report of 1952/53 No. 9"（タイプ・コピー），ポートモレスビー，National Archives of Papua New Guinea, 参照。

（注4） ニューギニア島南岸地域は19世紀末から白人統治下にあり，そこの人々の一部は最末端（警官，衛生看護助手）などに用いられていた。

（注5） Sinclair, James, *Kiap: Australia's Patrol Officers in Papua New Guinea*, パサースト, Robert Brown & Associates (Aust.), 1984年，114～115ページ参照。

（注6） 同上書 13ページ参照。

（注7） 同上書 16ページ参照。

（注8） 同上書 65ページ参照。

Ⅲ 近代経済システムへの統合

テイラーのこの施策はニューギニア高地の上にキャップと統治府の権威を確立し，その秩序に従わせるという最初の段階を超えた新たな展開の一歩を踏み出すものであった。

それはまず第1に，誰の目にも明らかなように近代経済システムのなかにニューギニア高地人を招じ入れることを目的としたものであった。

テイラーの貨幣支払の導入より3年遅れて，1950年にはオーストラリア政府と国連派遣団との間に，高地人を海岸地域のプランテーションで働かせることを認める合意がなされた(注1)。その年，2445人のニューギニア高地人が応募して海岸諸県のプランテーションへと散っていった。労働期間は18カ月，給与は月5シリングの賃金と食事・衣服・住居の提供であった。この制度は後に高地労働計画（Highlands Labour Scheme。以下HLS）と呼ばれ，10年後の1960年には7000人が，65年には1万4500人が，この計画に応募して海岸地方に出かけていった(注2)。1966年，高地全体の総人口は84万1990人であった(注3)から，応募者の大半を占めていた16歳から24歳の若い男たちに占めるHLSの経験者の割合はかなり高いものであったと推測される。たとえばサザンハイランズ県のパンギア地区では1966年，16～25歳の男子のうち，実に34%が主としてこの計画に応募して村を離れていた(注4)。HLSに応募し飛行機に乗って村から遠く離れた風土的にも全く異なった海岸地域のプランテーションで高地の若者たちがすごした1年半は彼らの世界認識と価値観に深い刻印を刻みこまずにはおかなかったろう。彼らの世界の地平は村や道路を歩いていける近隣地域はおろか，高地そのものを超えてさらにその彼方にまで広がった。彼らは村落社会以外に，プランテーションや町といった全く別の環境があることを身をもって経験した最初の世代でもあった。彼らはニューギニア高地の変化第2世代を形成する。

サザンハイランズ県のイアリブ地域でHLSの募集が始まるのは1962年であるがこのことと対応するように思われるのが，85年時点でニューギニア全域に通用するリンガフランカであるピジン英語をしゃべれる世代としゃべれない世代の境目が40歳位であったということである(注5)。村の男たちの正確な年齢はつきとめにくいが，私の見聞では50歳代以上はピジン英語が全くしゃべれず，40歳代の男たちはだいぶ怪しいピジン英語をしゃべるが，40歳位から下になるとほとんど全員流暢な

ピジン英語をしゃべることができるのである。サザンハイランズ県でHLSが盛んであった1965年に16歳から25歳であった男たちは85年には36歳から45歳になっている。イアリブ地域にピジン英語を本格的にもたらし普及させたのはこれらHLSの帰還者だったのである。

これがHLSによる変化第2世代の特徴である。

ピジン英語をしゃべれるということはPNG国内のどこへいっても基本的に会話に不自由はしないということを意味する。逆から見れば，ピジン英語をしゃべれない人間にとって約700あると言われるPNGの言語のうち自分の言語圏の外は言葉の通じない異郷であるということである。たとえばイアリブ地域の老人たちがバスで1時間半のマウントハーゲンの町へ出かける時は，ピジン英語のしゃべれる息子や娘が同伴して通訳をしなければならない。ところが，若者たちにとっては，ハーゲンタウンは「自分の裏庭のようなもので目をつぶってでも歩ける」所なのである。

ピジン英語をしゃべれるかしゃべれないかによって，その人間にとって現われる世界の様相は根底から変わってくるのである。

老人たちはインボング族以外の何者でもないが，変化第2世代以降の村人たちは，同時に，それを超えてパプアニューギニア人でもあるのだ。つまり，HLSは単にプランテーションでの賃労働という近代経済の経験をもたらしただけではなく，さらに深く，人間の世界帰属の構図そのものを変化させ，新石器部族民を国民へと変質させる触媒の役割を果たしたのである。

ニューギニア高地の1950年代は（後進地域では60年代）テイラーの予期を超えて，貨幣経済においてよりもむしろ，世界観の構図において一変した変化第2世代を産み出したのであったが，同時に，さらに新たな変化を胚胎しつつあった。

1951年，オーストラリア本国では連邦政府が労働党から自由党・カントリー党保守連立政権に変わった。その海外領土相に就任したポール・ハズラック(Paul Hasluck)は実に以後1963年までその衝にあたることとなる。彼の政見と個性が現代ニューギニア史の進路に与えた影響はきわめて大きいものがあった。

イアン・ダウンズ(Ian Downs)によればハズラックの12年の施策の基本方針は，次の5つであった(注6)。

「1. 行政：均一な発展と同質的社会のための基盤として全土に統治を急速に拡大すること(注7)。

2. 教育：普遍的に初等教育を施すためより多くの学校（必要なら何百でも——引用者）をつくること。英語と宣教教育は国民統合，普遍的コミュニケイションおよびそれを通じて「近代化」に人々を導くであろう。

3. 保健衛生：前政権をひきついで高い優先順位を与えられた。ハズラックは健康は他の全ての前進のためのプログラムの前提条件であるというガンサー(Gunther)博士の見解を受け容れた。

4. 経済発展：(a)村落レベルでの農業訓練。(b)新たな輸出用作物の展開およびパプアニューギニア人が範を求めうるよう白人の入植者を奨励すること。

5. 政治的発展：均等な発展が達成されるまで農村レベルでの地域自治を訓練の場とする。先進地域のコミュニティは他地域が追いつくのを待つよう期待される」。

その基本精神は不平等と分裂の芽となる近代化の地方ごとの格差を極力抑え，最も基本的な村落レベルから万人に平等に近代化のための基礎準備

を進めていくことである。結果的にきわめて適切であったこの方針は1950年代のニューギニア高地社会の変容にまた新たな局面を加える契機となった。

第1の方針によって，ニューギニア高地の未統治地域は急激に減り，1950年代の末には，キャップの統治下に入っていない地域はごく辺境の地域だけとなった。イアリブ駐留所がつくられたのもこの時期のことである（第1表参照）。

これが他の全政策の遂行にとって前提条件を成すことは言うまでもない。

保健衛生は第2の前提である。それまで外部世界から遮断されていた社会が急激な接触にさらされると，その住民が免疫をもたぬ疫病が急速に広まるのは19世紀から20世紀初頭にかけて南太平洋のいたる所で見られた現象であり，その結果，人口が半分以下に減ってしまった社会もある。このような事態が起きれば社会そのものが危殆に瀕し，経済発展や政治的独立以前の問題となる。幸いにも，ニューギニア高地は統治の早い段階から保健衛生政策が実施され，逆に幼児死亡率が減少し人口増加の道をたどることとなった。これは，以後の変化に陽に陰に影響を及ぼすこととなる。

次いで際立った成功を収め，また人々の関心を集めたのは経済発展政策であった。教育と政治的発展はいまだニューギニア高地の人々の意識と生活にはあまりに遠く，それらが意味をもってくるのは1960年代以降のこととなる。

われわれはここで再び，1950年代が始まったばかりのゴロカ地域に立ち戻ることにしよう。

1948年，ゴロカに交易ストアを開き，数日で在庫の品を売りつくしたジム・リーヒーの真の目的はコーヒー農園にあった(注8)。戦争中，ジム・リーヒーは ANGAU (Australian New Guinea Administration Unit。大戦中，文民統治に代わって臨時に設けられた軍政統治機構）の士官としてアイユラ(Aiyura)の農事試験場に属していたが，そこで彼はたまたま試験場を訪れた蘭領東インドに在住経験のあるオランダ人農業家に出会った。戦争が終わったら茶のプランテーションを始めたいというリーヒーに，その男は投下資本が大きく大規模プランテーションで大量に出荷しなければ採算のとれない茶の代わりに，小さな資金で始められ，小規模農園でも採算のとれるコーヒーの栽培を勧めた(注9)。ジム・リーヒーはその言葉を胸に刻みこみ，戦争が終わるとコーヒーに賭けるつもりでゴロカへ向かったのである。

店を開いてすぐ後，空港から8㌔ほど離れた所に，小区画を手に入れたリーヒーは，1948年12月農事試験場からコーヒーの種をもらいうけ，その土地に苗床をつくった。約1年後苗を苗床から畑に移し替え，リーヒーのコーヒーは順調に育っていった(注10)。リーヒーのコーヒーの順調な成長を見た幾人かの白人が後に続こうとした。しかし，当時の統治府は原住民の土地が白人の手に渡ることに難色を示し，1951年までに6つの農園があわせて140㌶のコーヒー畑を拓いたにとどまった(注11)。

このような状況にあった時，オーストラリア本国で政権交代が起きた。すなわち，ハズラックが前に掲げた方針をもって海外領土相就任に臨んだことで，スタートしたばかりのコーヒー栽培の拡大を阻害するたががはずれ，絶好のタイミングで追い風が送られることとなった。

1952年，統治府はニューギニア高地を白人による土地買取のために門戸開放した(注12)。ハズラックの経済発展方針の(b)に沿った処置である。

同年7月，ジム・リーヒーは最初のとりいれを

行なった。この時の売価は1瓩当り1.6A^{ドル}，1968年時点の2倍の高価格であった(注13)。最初のコーヒー出荷は，これもまた絶好のタイミングでコーヒーの国際価格の上昇気流に乗ったのである。

このような幸運に恵まれたリーヒーの成功とハズラック登場による開放政策がしめしあわせたようにほとんど同時に起きたことが白人たちの間にコーヒー入植熱の火を点けた。戦前，ブロロ金鉱でのゴールドラッシュを目にしている地方行政原住民部の副部長イアン・ダウンズは次のように記した。「雰囲気は戦前，金が発見された当時のように熱狂的なものだ」。違うのは，今回は「ゴールドラッシュではなく土地ラッシュだという点である」(注14)。

1952年から54年までの3年間に白人が現地人から買いとった土地は，48年から51年までの4年間に買いとられた土地の10倍以上にのぼった(注15)。

こうした土地あさりの報道はオーストラリア本国に批判の声を生み出し，1954年，ハズラックは開放政策の軌道修正に乗り出した(注16)。それまでの，全てを白人入植者と現地社会の交渉に委ね，政府は事後的にめくら判を押すだけという放任政策から「政府が自らの判断で，その土地が現在もしくは未来において原住民自身の必要を満たすために不可欠な土地ではないとみなさない限り」新たな土地買い取りは認めないという介入政策に転じたのである(注17)。凍結以前の取得地は別として，それ以後1957年に至るまでの3年間に認可された買い上げ件数は2件のみとなった(注18)。

(注1) Downs，前掲書，47ページ参照。

(注2) Griffin, J.; H. Nelson,; S. Firth, *Papua New Guinea: A Political History*, リッチモンド, Heinemann Educational Australia, 1979年，114ページ参照。

(注3) Downs，前掲書，319～320ページ参照。

(注4) Harris, G. T., "Labour Supply and Economic Development in the Highlands of Papua New Guinea," *Oceania*, 第43号，1972年，128ページ参照。

(注5) 海岸のプランテーションではニューギニア各地から異なる言語集団の男たちが集まるため，リンガフランカであるピジン英語によって生活や労働を進めていかねばならなかった。そうして労働者たちはピジン英語を覚え，各出身地へと持ち帰ったのである。

(注6) Downs，前掲書，94ページ引用。

(注7) これは駐留所を増やしてオーストラリアの統治の外にあるような地域をなくすことを意味する。先進地域と後進地域の間に後々格差を生み出し，部族間の不平等やニューギニア領内の分裂の芽となることを避けるためである。

(注8) Finney，前掲書，41ページ参照。

(注9) 同上書 44ページ参照。

(注10) 同上書 43～44ページ参照。

(注11) 同上書 45ページ参照。

(注12) 同上。

(注13) 同上。

(注14) 同上。

(注15) 同上。

(注16) 同上書 46ページ参照。

(注17) 同上書 47ページ参照。

(注18) 同上。

Ⅳ 高地民によるコーヒー生産の開始

白人入植者が熱狂にかられていたとするなら現地人の側も実は同様に熱狂していたのである。そもそも土地取得は，征服時代ならばともかく，第2次大戦後のニューギニア高地では現地社会の合意なしには成立しえず，そうである限り，白人側の熱狂に応ずる雰囲気が現地社会の側にもなければ1952～54年にかけての急激な土地売買の増加は起こり得なかった。

フィニーは現地社会の状況を次のように推測した。すなわち，ニューギニア高地が開かれて，白

人と接触した高地社会は交易によって空前の大活況を呈した。この経験が，白人と交渉することによって大きな利益を得ることができるという楽観的期待感を人々の間に育んだ。その結果，白人を自分たちの土地に迎え入れる（つまりそれが彼らにとって土地を売るということだ）ことによって，富の源を自分たちの中に抱えこめるのではないかと考えた，というのである(注1)。

フィニーのこの推論は，この時代から20年以上を経た現在でもニューギニア高地では妥当するように思われる。外国人を富の源として土地に迎え入れたいと期待する心情は現在もなお根強く，私がアンブプル村に住みついたのを知った他クランの老人は，他にこの村へきたがっている日本人はいないのか，とたずねてきた。きたら俺の土地に住まわしてやるのだが，というわけである。

このような心理が働き，ゴロカ地方の村々は競うように白人たちに向かって自分たちの土地を使ってくれるよう申し出たのである(注2)。

また，白人を自分たちの土地に招じ入れることによって，白人たちが享受しているあの豊富な富をどうやって手に入れているのか秘密を知ることができるのではないかという期待も働いていた，とフィニーは推測している。この推論も当を得たものであると私には思われる。すなわちカーゴ・カルト（来福信仰）の精神である。

おそらく，この謎，すなわち近代文明の巨大な生産力を支えるものは一体何であるのか，という問は，近代文明にぶつかった世界のあらゆる社会で発せられたに違いないが，1950年代のニューギニア高地人は，実証的に，自分たちの土地に白人を住まわせ，その行動を見ることによってその答を見出そうとしたのである。

ところが，彼らの目に映ったのは何の変哲もない木の苗を植える白人の姿であった。人々の間にはこの木の実が「本当に貝を買うのに使える貨幣と交換できるのだろうか という 懐疑」(注3)が存在した，という。

ジム・リーヒーの成功はニューギニア高地人にも強い感銘を与えたに違いない。

統治府の農業・畜産・水産部（DASF）がゴロカ地域の村々の希望者のために，コーヒー栽培の指導を始めたのはリーヒーの成功の直後であったが，翌1953年前半にはすでに DASF の農業普及官が通過したゴロカ地域からチンブーにまで及ぶ多くの村々がコーヒーの苗床を持つに至った(注4)からである。

そしてさらに1954年末にはゴロカ地域のどこへいっても必ず数人ほど，野心的な男たちがモデル農園を持っているまでに普及した(注5)。1955年には村々から栽培指導を求める訴えが DASF の手にあまるほどに増加した(注6)。ゴロカ地域の住民たちの間にも，白人入植者と同様，コーヒー栽培に対する熱狂が一気に燃え広がったのである。

それに対して1959年，DASF は会議を開き，コーヒーの植付奨励をやめることに方針を転換した(注7)。

しかし，いったん火のついた熱狂を鎮めるには時すでに遅く，コーヒー栽培のノウハウは，ゴロカ地域全体に行きわたっており，むしろコーヒー樹の新規植付は1960年に最高潮に達したのである(注8)。

1962年，コーヒーの現地人へ向けての植付指導が始まってから10年で，ゴロカ地域の住民は約200万本のコーヒーの木を植え終えていた。そして，1963年から65年までの3年間，コーヒーの植付は毎年約50万本ずつ増えていき，65年6月にはゴロカ地域の住民が持つコーヒーの総本数

は343万8000本に達した(注9)。

そして植付から3年後にコーヒーの木は実を結び，4年後からは本格的に収穫が始まり，植付けの爆発的増加に4年の遅れを置いて，生産量も爆発的に増大していった。

このコーヒーブームはゴロカ地域においてだけではない、少し遅れて，チンブーおよびマウントハーゲン両地域にも同様に広がった。

PNGの輸出統計をみると，1950年に8000US$ドルであったコーヒー輸出総額は，55年には20倍近い15万US$ドルに，60年にはそれをさらに約9倍した143万4000US$ドルに増え，この間の年平均成長率は80%にも及ぶ。その後もこの勢いは衰えることなく，2018万2000US$ドルとなった1970年に至るまで60年代を通して毎年20～60%に及ぶ奇跡の成長を遂げたのである。

コーヒーの成育に好適な気候は海抜1800メートル以下の高地地帯において実現されるので，PNGのコーヒー輸出額はほぼそのまま高地の生産額を反映している。

そして統計上PNG現地人のコーヒー生産量に占める割合は年を追って伸び1970年には全生産量の78%にまで達しているから，ニューギニア高地人はその年，コーヒーを通じておそらく控え目に見積っても1000万US$ドル以上を手にしていたことだろう。

1948年初めにニューギニア高地人の手にあった貨幣総額はテイラーの与えた給与2880US$ドルのみであったから（それ以前は0），ニューギニア高地の貨幣経済（購買力）は22年間のあいだに，コーヒー以外の収入を除外しても数千倍の成長を遂げたのである。約20年の間これほどの経済成長を成し遂げた地域は全世界を通じて歴史上どこにも存在しなかったであろう。それほどに，新石器社会から20世紀後半の近代経済への跳躍は驚異的なものであったのである。

（注1） Finney，同上書，50ページ参照。
（注2） 同上書 49ページ参照。
（注3） 同上書 64ページ参照。
（注4） 同上書 60ページ参照。
（注5） 同上書 61ページ参照。
（注6） 同上書 64～65ページ参照。
（注7） 同上書 66ページ参照。
（注8） 同上。
（注9） 同上書 67ページ／Downs，前掲書，270ページ参照。

V 貝貨から貨幣へ

このように急激な勢いで貨幣はニューギニア高地社会へと流れこみ，その反作用としてニューギニア高地社会は現代世界経済のなかに突入していったのである。

一方では，変化第2世代が海岸のプランテーションから続々と帰ってきつつあった。

それでは，あの貴重な貝の殻はどうなったのであろうか。貨幣はどのような形でニューギニア高地社会のなかに吸収されていったのだろうか。次にそれを見ていこう。

さて，1950年代，ニューギニア高地統治の中心であり最も先進地域であったゴロカ地域ですら人々の貨幣に対する反応は鈍いものにとどまっていた。そして「貨幣の使用が真に広まるのはゴロカ住民の収入がコーヒーを売ることによって上昇しゴロカ人自身が村のなかに交易ストアを建て始めた1960年代に入ってのことであった」(注1)。

おそらく，ゴロカ地域の住民たちの手で最初にコーヒーの収獲が始まったのは1956～57年であるから，試行期の3，4年を経た60年頃の収獲がゴロカ地域の広範な住民にかなり貨幣収入をもた

らし始めたことは疑いない。

だが，1960年という年は，ただ単にゴロカ地域だけではなく，マウントハーゲン地域においても貨幣が人々の価値体系のなかで至上の地位を占めだした年でもあるのである。

ロス神父の証言によれば，「貨幣は1959年にここ（マウントハーゲン——引用者）に導入された。それ以前は主として貝殻交易だった」(注2)という。

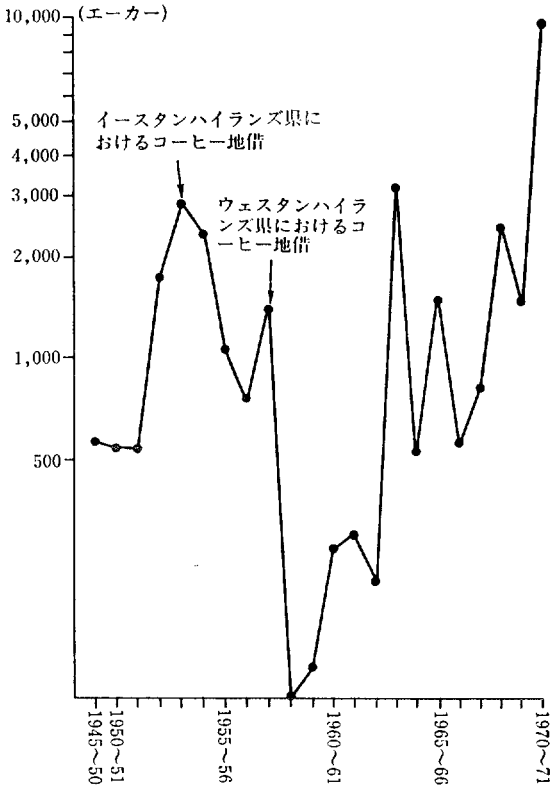
第2図に見られるようにマウントハーゲン地域においては，ゴロカ地域と比べてコーヒー栽培開始の過程は3～4年遅れて始まったから1960年時点でマウントハーゲン地域住民のコーヒー収入はいまだ微々たるものであったに違いない。

ハーゲン・タウンの北方デイ・カウンシル(Dei Council)地域において，住民のコーヒーが結実を始めるのはようやく1962年のことであるが，その年に早くも村落協議会への人頭税の徴収が始まっている。少なくともこの地域では貨幣の制覇はコーヒーの収入に先行した可能性があるのである(注3)。

さらに，驚くべきことに，1953年に初めて駐留所が開かれ，その当時，換金作物栽培による貨幣収入はおろか，HLS も始まっておらず，ゴロカ地域の48年以前の貨幣状況にあったイアリブ地域でも，59年に人々は貨幣を欲し，キャップに向かって，彼らのイモや野菜の対価を貨幣で支払うよう要求した。

さらに一層驚くべきことには，イアリブ地域よりもさらに遅れ，1961年にキャップによる統治が始まったパンギアにおいても，「60年代初期から（キャップの）報告は，現地人の貨幣を得たいという切実な欲求と換金作物の導入を求める叫びについて語っている」(注4)というのである。その当時パンギア地域で貨幣そのものを見たこともある人間が一体どれだけいただろうか。かなりの数の人間は見たこともない貨幣を欲したのではないだろうかと思われる。

第2図 1945年から71年におけるニューギニア高地での農業用土地取得



（出所） Southern, Roger, *Road Transport in the New Guinea Highlands*, ポートモレスビー, University of Papua New Guinea, 1973年，16ページ。

（注） 1945～50および50～51，セントラルハイランズ県全体値。
1951～52から1964～65，イースタンハイランズ県＋ウェスタンハイランズ県。
1964～65以降，チンブー県の数値も含む。

ここには，先進のゴロカ地域やマウントハーゲン地域に見られた貨幣が現われて10年以上にわたる鈍い反応と全く逆の事態が現われている。

少なくともこれは，フィニーのゴロカ地域の貨

幣浸透に関する推論「コーヒーによる貨幣収入の増大がもたらした貨幣流通の確立」には全く反する事態である。イアリブでも，パンギアでもその当時換金作物収入は皆無であったからである。

むしろ，種々の記録の検討によって明るみに出てくるのは，ニューギニア高地全体が，白人統治の有無，統治期間の長短，換金作物の有無を問わず，1960年を機として一斉に貨幣の中に価値を見出した，という事態なのである(注5)。

それは，ある時突然，東端から西端まで400粁以上離れ，それを貫く道路もなく，そのうちには数十の異なる言語グループ(民族)を含みこむニューギニア高地全体が貨幣の持つ値打ちに突然目ざめたかのようである。

ゴロカ地域では住民が1948年にリーヒーの交易ストアに殺到してから60年までの12年間に貨幣は広まらず人々は貝貨に固執した。一方パンギアでは白人統治そのものがまだ始まっていないのに，人々は見たこともない貨幣を熱烈に欲した。

この理由を説明しうる仮説があるとすれば，私には次のような事実に注目する必要があると思われる。

すでに述べたように，石器になる素材を産出する場所はニューギニア高地でもほんの数カ所に限られている。したがって，ほとんど全ての部族は交易によって石斧の刃を手に入れなければならない。そして原料産出地から離れれば離れるほど，交易ルートは長く，到着までにくり返される交易の回数は何十回にも上っていく。というのは，新石器時代のニューギニア高地には，当然のことながら商人などという職業は存在せず，村から村へと，村人たちの交易によって運ばれていったからである。

交易されるのは，石斧だけではない。黒く苦みの強い「塩」，人々が踊りの時に飾りとするさまざまな種類の鳥の羽根，やはり踊りの際に体を輝やかせるために塗る脂，そしてもちろん，遠く何百粁も離れた海岸の村からおそらく何百回となく持ち手を替えて運ばれてくる貝の殻，これらをめぐる交易の網の目がニューギニア高地またはそれを超えた海岸地方にまで広がっていた。

たとえばインボング族を中心とした近隣諸族に限っても，おおよそ次のような交易体系が存在したと思われる（第3図参照)。

村々の経済的自律性の高さにもかかわらず，交易ネットワークは，それなしでは村の社会構造と世代再生産を支える互酬体系も，基本的生産手段も成り立ちえないほどに重要なものであった。

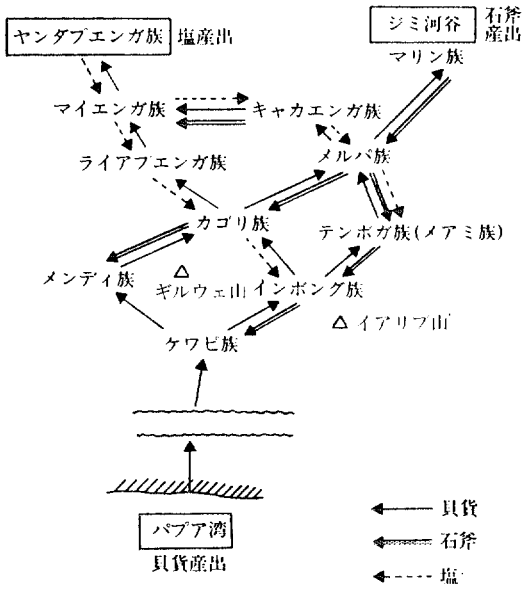
その重要性は，このネットワークがかく乱された時の高地諸族の反応によってもうかがい知ることができる。

メルパ族研究者A・ストラーサーン（Andrew Strathern）によれば1943～44年頃(注6)，マウントハーゲン周辺に発生したカーゴ・カルト運動は，すでに述べたヨーロッパ人の到来とそのもたらした莫大な貝貨や鉄斧の流入と関連がある(注7)。

その年，祖霊によって憑依された男たちが，子孫の所へ祖先が戻ってき，真珠母貝や鉄斧，ブッシュナイフやガラス玉，それに服などを木の箱に入れてくると告げた（真珠母貝，鉄斧，ブッシュナイフ，ガラス玉，服はすべて，当時，白人たちがブタやイモや労働を手に入れるために交易品として持ちこんだ品々であり，木の箱は白人がパトロールする際に荷物をつめて現地人荷物運びにかつがせたものである。それらは高地人の目に映った白人の富の姿であったろう)。

この祭儀運動の指導者は他村にもこの福音を伝えた。福音を受けた他村の者たちは伝道者たちのためにブタを屠り，真珠母貝を与えた(注8)。

第3図　近隣諸族の交易ネットワーク略図



(出所)　Meggitt, M. J., "Pigs Are Our Hearts!: The Te Exchange Cycle among the Max Enga of New Guinea," *Oceania*, 第44巻, 1974年, 86～87ページ。

(注)　エンガ族に関しては同上参照。マリン, メルパ, テンボガ族に関しては, Gitlow, Abraham L., *Economics of the Mt. Hagen Tribes, New Guinea*, シアトル, University of Washington Press, 1966年(初版, 1947年), 68～80ページ, および Strathern, Andrew, *The Rope of Moka: Big-Men and Ceremonial Exchange in Mount Hagen, New Guinea*, ケンブリッジ, Cambridge University Press, 1971年, 111～114ページ参照。メルパより東の, 本稿では直接扱わない地域については, Hughs, Ian, "Stone-age Trade in the New Guinea Inland: Historical Geography without History," H. Brookfield 編, *The Pacific in Transition*, ロンドン, Edward Arnold Publishers, 1973年, 97～126ページ参照。

ストラーサーンによれば, この祭儀運動はネビリア(Nebilyer)河谷のテンボガ(Temboga)族に始まり, さらに遡ればそれ以前, さらに南のイアリブ地域, すなわちインボング族に発する(注9)。

ストラサーンはこの祭儀運動を白人たちの到来によって変動を蒙った交易体系に関連させた。

第3図においては, 貝貨は南のインボング族からテンボガ族を経てメルパ族へ流れている。これが白人到来前, 本来の交易の流れである。

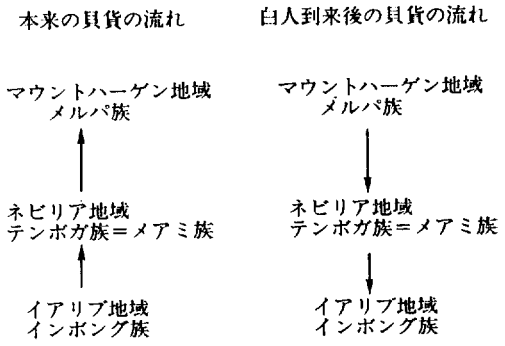
ところが, すでに述べたように, 白人がマウントハーゲンに拠点を定め, 食物や労働を得るために, 現地の村人たちに「ただ同然で」ふんだんに貝貨を与えたのである。

また, 貝貨の急増にもかかわらず, その価値は低下せず, 依然根強い需要によって吸収されてしまったという(注10)。これもすでにわれわれの見たとおりである(第4図)。

ストラーサーンの推論は, この祭儀運動の発火点は, 第2次大戦勃発による白人の撤収が一時的に貝貨の供給を減少させ, 白人との取引で利を得ていたマウントハーゲン周辺の村人たちが, 品薄となった貝貨に高値をつけて利益を確保しようとしたことによって起こった, とするものである(注11)。

しかし, イアリブ地域における私の調査によればストラーサーンの年代確定は誤っており, 実はこの祭儀運動は1950年に生じたものと考えられるので, 彼の推論は崩れることになるが, しかしなお基本的に次の論点は妥当性を失わないであろ

第4図　貝貨の流れの変化



(出所)　筆者作成。

う。

その論点とはすなわち，白人の到来による交易体系のかく乱である。これが，祭儀運動の素因であることはストラーサーンの考えるとおりである。

以下，私の推論によれば，事態は次のようなものであった。

ポイントは2つある。

まず第1は，イアリブ地域はそれまでの輸出品目である貝貨の供給源としての地位を失い，石斧や塩の対価となるべき輸出財がなくなったことである。これはこの地域の住民の手にわたる石斧の供給が低減するということを意味する。石斧はすぐさま摩耗するものではなく耐久性を持っているため，当座はひっ迫感は薄かったであろうが，白人たちが初めてマウントハーゲンに現われて17年が経った1950年頃には，おそらく石斧の入手困難は無視できぬほどに表面化していたであろう。マウントハーゲン地域の住民は白人たちから鉄斧を入手し，そのため，石斧のルートがそこで途絶してしまったことも考えられる。イアリブやネビリアの住民たちは何らかの方法で石斧をはじめとする品々を手に入れたいと思っていたはずである。

第2はイアリブ地域の人々の話によれば，イアリブ地域にこの運動が起こったのはマウントハーゲンから2人の白人行政官がこの未踏地域を通過していった後だということである。

当時の記録を調べてみると，2人の白人がイアリブ地域を初めて通過したという状況に適合するのは，1949年11月26日から50年1月28日にかけてマウントハーゲンの県知事補のA・ティンパリー（Allan Timperley）とパトロールオフィサーB・B・コリガン（B. B. Corrigan）がイアリブ地域を抜けてネンビ（Nembi）河谷へ至り，マウントハーゲンへ帰還したパトロールである(注12)。それは未開のこの地域に白人統治を始めるための県庁所在地候補さがしのパトロールであった。

それまで，北辺の一部村落を除いて，イアリブ地域のインボング族は白人の姿を見たことがなかった。少なくとも，イアリブ地域で祭儀運動を始めた指導者たちにとって，その時が白人との初めての接触であった。

ただ，マウントハーゲン地域に異人が現われたという話はすでに伝わっていた。老人たちの想い出によれば，マウントハーゲン地域に精霊がやってきたとのうわさが広がり人々は恐れたという。インボング族はまだ見ぬ白人を精霊のカテゴリーに入れて解釈したのである。

さらに前に述べたように，白人たちが最初から飛行機によって物資を運んだことは，人々に白人の到来を，空からの精霊の帰還だと考えさせるに十分であったろう。

そして到来した白人たち（イアリブ地域の人々にとっては帰還した精霊）は素晴らしく貴重で稀少な富を「ほとんどただ同然で」マウントハーゲン地域の住民にばらまいた。このこともイアリブ地域の住民は，彼らの交易の逆流という形で骨身にしみて知らされていたに違いない。

そこで彼らが描いた事態の相貌は，マウントハーゲン地域には空から精霊がやってきて，稀少で貴い富をただで分かち与えた，ということであったろう。彼らの地域にもこのような精霊が訪れることを期待する願望がおそらく潜在的にあり，そして生活を支える基本的生産手段の石斧は不足しつつあった。

そこに初めて白人が現われたのである。

2人の白人はあわただしく去っていったがあと

に鉄製の山刀やたくさんの缶詰の空きかんを残していった。

イアリブ地域の人々は，ついに時はきたのだと考えたに違いない。マウントハーゲン地域に巨大な富をもたらした精霊がついに彼らのところにもやってきたのだ。

そして，ある日，1人の男がイアリブ山（標高3465㍍の高山。ギルウエ山とともに天界に等置される。白人たちが飛行機で空から物資を運んだことがここに反映されている）に登り，精霊に出会った。精霊は彼に向かって，インボングの人々に巨大な富を与えることを約束した。

男は山からおりると人々にこの福音を伝えた(注13)。

精霊とその富を迎え入れるための祭儀運動が，イアリブの地を爆発的に席捲した。

それは北上して隣りのネビリア地域の人々を包みこみ，ネビリアからさらにマウントハーゲン地域にまで広まった。

これが，おそらくイアリブ—ネビリア—マウントハーゲン地域を席捲した祭儀運動とその信仰内容が生成・展開していった道筋であったろうと私は考える。

白人の到来によって交易ネットワークに生じた乱れは三つの民族を貫いてきわめて激しい反応を生み出したのである。

そして，この祭儀運動が，異なる三つの言語という障壁を超えて，またたく間に広がったことは，交易ネットワークとその上を流れる富のフローが，各々の民族社会成立の基盤に大きく関わり，高地諸社会は，村ごとに自律性を誇って分立し，戦争と言語の壁によってさえぎられながらも，その水面下では交易の流れによって地下茎のように互いに連結されていたことを示唆しているように，私には思われる。

同様の，精霊による富の到来を待望し，迎えいれるための祭儀運動は，1940年代から50年代初頭にかけて，イアリブ—ネビリア—マウントハーゲン地域のみならず，ニューギニア高地の東から西までの各地で発生しているのである。

ニューギニア高地の言語的にも政治的にも異なったさまざまな社会は，同時に網の目のように覆われた交易体系によって互いの基底を連結されており，それを媒介として互いに陽に陰に影響を及ぼしあっていた。

これがわれわれの議論が到達したニューギニア高地像である。

そして，このようなネットワークは1カ所に起こった変化が，他の部分に波及していくという性質を持つと同時に，1カ所に起こった変化は体系のもつフィードバック作用によって吸収もされうる。

上述の祭儀運動も白人到来による交易体系のかく乱に対する体系再組織の反応と見られなくもないのである。

（注1） Finney，前掲書，42ページ参照。

（注2） Mennis，前掲書，135ページ。

（注3） Strathern, Andrew, "The Red-box Money Cult in Mount Hagen," *Oceania*, 第50巻，1979年，96ページ参照。

（注4） Harris，前掲論文，124ページ参照。

（注5） ゴロカ地域については Finney，前掲書，42ページ。マウントハーゲン地域についてはMennis，前掲書，135ページ。コロバ地域については Harris，同上論文，124ページ。エンガ地域については Meggitt, M. J., "Pigs are Our Hearts!: The Te Exchange Cycle among the Mae Enga of New Guinea," *Oceania*, 第44巻，1974年（再版，*Studies in Enga History*, シドニー，University of Sydney, 1974年）73ページ。イアリブ地域については，Kelly, Richard John, "Ialibu Patrol Report 1959/69 No.

8"(タイプ・コピー), ポートモレスビー, National Archives of Papua New Guinea, 7ページ参照。パンギアについては Harris, 同上論文, 124ページ参照。エンガ族に関しては Meggitt, 前掲論文, 86～87ページ参照。マリン, メルパ, テンボガ族に関しては Gitlow, 前掲書, 68～80ページ, および Strathern, Andrew, *The Rope of Moka: Big-Men and Ceremonial Exchange in Mount Hagen, New Guinea*, ケンブリッジ, Cambridge University Press, 1971年, 111～114ページを参照。メルパより東の, この論文では直接扱わない地域については Hughs, 前掲論文を参照されたい。

(注6) 私の調査によれば正しくは1949～50年頃である。

(注7) Strathern, Andrew, "Cargo and Inflation in Mount Hagen," *Oceania*, 第41巻, 1971年, 255～265ページ参照のこと。

(注8) 同上論文 256ページ参照。

(注9) 同上論文 257ページ参照。

(注10) 同上論文 262ページ参照。

(注11) 同上論文 263ページ参照。

(注12) Timperley, Allen, "Patrol Report No. 4, 1950 Mt. Hagen" (タイプ・コピー), ポートモレスビー, National Archives of Papua New Guinea, 参照。

(注13) ケロ村のパレ老人からの聞き書きより(1987年)。

VI 二つの交易ネットワークと"bisnis"

さて, 再び, 貨幣のニューギニア高地全体への1960年頃における同時普及という問題に立ち帰る時, この祭儀運動の民族や村落集団の壁を超えた伝達の速さとそのニューギニア高地各地での同時多発性はきわめて示唆するところが大きいと言わねばならない。

ここから私は, 貨幣の普及の一挙同時性もやはり交易体系を通して生じたのではないかという考えに導かれた。

1948年, テイラーによってゴロカ地域にもたらされたにもかかわらずゴロカ住民は10年以上も鈍い反応を示したことも, 逆に60年頃に貨幣が普及するや, 白人社会との接触の有無に関わらず高地全体に一挙に広まったことも, この一つの要因, 陰伏する交易体系に発するものだと思われるのである。

すなわち, 以下のように考えられる。

貨幣が導入された後も, 依然として交易体系は貝貨本位で動いていた。

流れる貝貨は激増したが, 人々の貝貨への欲求はとどまるところを知らず, 激増に見合う価値低落もなく交易ネットワークの毛細血管を通って高地諸社会のなかに貪婪に吸収されていった。

交易ネットワークは, 次のような形で, 貨幣の導入された地域の住民の価値体系を旧来どおり, 貝貨に繋ぎとめる作用を果たしていたと思われる。

まず, 貨幣を白人から与えられた住民が, 貨幣を知らない住民に差し出しても, 貨幣を知らない住民は, それとひきかえに貴重な飾りや自分の娘を相手に与えようとはしないであろう。なぜなら, 彼にとって初めてみる紙幣や硬貨は, 新聞紙の切れはしや, 路傍の石ころと変わるところがないからだ。先にわれわれは, 1人の男が「10ジン紙幣(1 A^{ドル})を火のなかにほうりこむ真似をして, 彼の貨幣に対する評価を示し」たことを見た。初めて見る者にとって紙幣は紙切れや木の葉と同じくずなのである。

とすれば, 貨幣を手にした住民も, 貨幣を使うことはできず, やはり昔どおりの貝貨に頼るであろう。

しかし, 貨幣から, それが何らかの必要な物, 欲しい物に替えられるという性質を奪ってしまえば, それはただの紙切れと何の変わるところがあるだろうか。人が貨幣を貯めこむ, としても, そ

れは，貨幣が最終的に他の物に替えられるという了解があればこその話である。

また，白人の店へいって物を買えばいいというかもしれない。だが，ニューギニア高地人が買いたがったのは鉄斧や山刀などの鉄器類と貝貨であった。鉄斧や山刀は一つ買えば，それほど頻々と買い足す必要はないものである。したがって，白人から渡されても，貨幣の使い道がない。使い道のない紙幣や硬貨はただの紙切れや石塊にすぎない。

こうして，食物や労働とひきかえに白人から貨幣を渡された先進地域の住民も，貨幣に価値を見出すことができなくなる。

おそらく，ゴロカ地域の住民の間で，貨幣の導入以来，10年以上も受け容れられなかったのはこのような事情によるものであろうと思われる。

依然として貝貨への欲求は高く，マウントハーゲンの北方のデイ地域の住民が，貝貨を求めて，おそらく野宿をしながら，言葉も通じない未知の異民族の土地を通って直線でも150㌔以上離れたゴロカへ貝貨を手に入れるために働きに出かけたのは1958年のことである。

だが，貝貨から貨幣への転換は，突然，その直後にやってきた。

なぜ，他ならぬその時点で，転換が起こったのかについては交易体系による定常化機能（ホメオスタシス）が限界点に達したのだとしか答えようがない（それは特定の地震がなぜ特定の時点に起こったのか，という問同様われわれの分析の精度では完全には答えられない）が，どのようにして，その転換が高地全体に迅速に広がったか，そのメカニズムは次のように十全に説明しうる。

同じ事情が今度は逆の方向に作用したのである。

すなわち，ある時，貝貨に対する信用を失った住民は，まだ貝貨に価値を認めている住民から貝貨を示されても，われわれ同様，ただの貝殻としか見えなくなっている。彼は当然，交易の申し出を断わり，代わりに貨幣を要求する。貝貨をただ同然に見積もられ，貨幣を要求された相手は，実は貨幣にこそ本当の価値が潜んでいるのではないかと考え始める。この懐疑は交易ネットワークを伝って伝染していく。交易ネットワークがどこかで途切れない限り，それは必ずどこかに，貨幣しか認めない者と貝貨にいまだ価値を見出す者の接点が生まれ，上に述べた事態が進行するからである。

1960年には，先進のゴロカ地域はもちろんのこと，白人の統治の長い地域では HLS から帰ってきた，貨幣の使用を実地に身につけた変化第2世代の若者たちが高地のあちこちに散らばっている。貝貨本位の交易の網の目は決して1カ所ではなく，あちこちで破れ始めたのである。その結果，上のような接点はニューギニア高地の至る所に発生し，そこに上に述べたような懐疑と混乱が生じたはずである。

こうして，高地の各社会を支えていた交易体系がずたずたになり始めた。それは各社会そのものの存立を根元から揺すぶらずにはおかない。

その結果，貝貨は交易上の流通性を大きく落としたに違いない。すでに述べたように，流通性を失った通貨は，何の価値もないがらくたに転落せざるを得ない。

そして，コーヒー栽培を始めた先進地域の住民の手に貨幣収入がはいり出したのが1957年頃，それ以降、貨幣の流入の速度が幾何級数的に早まっていったのはすでに述べた。彼らの手中では，貨幣の量が貝貨の量を圧倒し始めたことであろう。そうした先進住民は自分の手元に流れこんでくる貨幣が通貨の地位を獲得すれば，それを持たない

地域との交易において一気に有利となる。彼らは貨幣を通貨とすることを頑強に主張したことであろう。

これらの状況があいまって，交易ネットワークの貝貨本位制維持機能は臨界点に達し，崩壊したのである。いったん，崩壊が起これば上に述べたようにそれはネットワーク全体に広がっていく。こうして，貨幣をほとんど見たこともないであろうようなウィル族ですら，貨幣を欲するようになったのである。

1959年の「イアリブパトロール報告」(注1)をたどれば，インボング族が，キャップに，初めて貨幣への欲求を述べたのは59年のことである。当時，イアリブの地には換金作物栽培も始まっておらず，HLSの徴募も行なわれていない。翌年，徴募が始まると多数の若者が応募を希望し，それ以外にも統治府や他郡の白人入植者に雇われたいと望む者の数は急激に増えた。ある村では労働できる年齢の男たち86人中，29人までが村の外へ働きに出ている。貨幣を手に入れたいという人々の願いは1960年，圧倒的なものとなったのである。

当然，換金作物をもってきて欲しいという要望も強まった。

しかし，1960年代を通じてイアリブ地域に換金作物を導入しようとする試みは失敗に帰し，住民が手にする貨幣は，キャップが食物や労働に支払う幾ばくかの金と，HLSその他で村外へ働きに出た男たちが持ち帰るわずかの給金であった。

にもかかわらず，住民たちは意外なほど，かねを握っている，と1965年の「パトロール報告」は驚きを記している(注2)。おそらく，交易ルートや婚資をとおして，ネビリア地域の住民から手に入れたのであろう。

1965年の初め，白人宣教師がもつ3軒が交易ストアーの全てだったイアリブ地域に新たに交易ストアーに対する熱狂が高まり，数カ月後には住民が経営する10軒近くの店が建ち，さらに3軒がキャップに新設計画を打診している(注3)。

換金作物が軌道に乗り，貨幣がすでに大量に流入を始めていた1961年のゴロカ地域ですら，現地人の交易ストアーはわずか8軒である。

明らかに，イアリブにおいては，貨幣の受容が先行し，現金収入を大量にもたらす換金作物はそれよりずっと遅れたのである。

これは，ゴロカ地域に関するフィニーの説明「換金作物収入による貨幣取得の急増がもたらした貨幣の受容」とは全く相反する逆現象である。

むしろ，キャップの報告によれば，統治府の換金作物普及の努力が失敗に帰するにしたがって，人々は貨幣を取得するため交易ストアーに向かっていったのである。

それはなぜなのかを知るために，ここでわれわれは再び交易ネットワークについて想起してみよう。

交易体系においてはわずかの生産地の住民を除けば，ネットワーク上の圧倒的多数の人間は仲介交易者の地位に立っていた。彼らは中世ヨーロッパの香料貿易商と同様，富を，生産によってではなく，ネットワークの上に流すことによって手に入れていたのである。ニューギニア高地の男たちは，全員がこうした，交易商人（それを職業としているのではないが）の性格をもっていたのであった。彼らにとって富が手に入るのは，生産からではなく流通によってであった。

このことを鑑みるなら，貨幣そのものの収入源が地域内にはないにもかかわらず，あるいはむしろそれゆえに，人々が交易ストアーを開くことによって新しい富の形である貨幣を手に入れようと

したのはきわめて自然な反応であったことが了解されうるであろう。

しかし，同時に，この交易ストアーの簇生は，人々が，流通の回路を交易ネットワークから交易ストアーに移し変え始めたということを物語るものでもある。富の流れを司るのは，もはや交易ネットワークではなく，交易ストアーとなったのである。交易ネットワークを通して貝貨にとって代わった貨幣は，その流れの本来の回路である交易ストアーをもたらすことによって，交易ネットワークそれ自体を衰退させたのである。今日では，交易ネットワークはほとんどあとをとどめぬまでになっている。

このような変化のなかから，この当時一つの単語が出現し，一瞬にしてニューギニア高地全域をなぎはらった。それは人々の心を魅了し，人々の合言葉となり，理想の目標として人々を行動に駆りたてる内的起動力を揮った。誰もがそれを行なうことを望み，富と栄光をもたらすものと見なし，そして，男が力と有能さを示す証しとなった。

その言葉は英語の“business”に発するピジン英語の“bisnis”である。ごく大把みに訳せば「金儲け」とでもいったところだろうか。しかし，この語には日本語の「金儲け」では全く失われてしまう誇りと憧憬の感情が託されているのだ。そして，それは，われわれとは異なる，ニューギニア高地人にとっての「金(かね)」すなわち彼らの目に映ずる貨幣の意義と不可分一体のものなのである。

この語には，私の経験によれば，2つのニュアンスが伴っている。

1つは自営性，自分自身がオーナーであるというニュアンス。したがって，日本で大企業に勤めて，ビジネスマンと呼ばれている人間たちは，ニューギニア高地では“bisnisman”の名に値しない。むしろ，商店主や食物屋の主人といった人間たちが“bisnisman”の栄をうけるべきである。ニューギニア高地人に言わせれば，人に使われている分際で何が“bisnisman”か，というところであろうか。

もう一つは流通への指向性，たとえば，300本や500本ほどのコーヒー園を持っている家族は年収200～300*ナ (kina。約3万～4万5000円[1987年現在])程度の自分の経営を“bisnis”とは呼ばない。もう一桁ふえて数千本クラスの農園を持てば“bisnisman”と呼ばれるが，それは単に規模が大きいから，というわけではない。たとえば，年収200～300*ナどころか，利益より赤字ぎりぎりで全く収益のないような交易ストアーの持ち主でも，依然として“bisnisman”なのである。重要なことは，金が流通していくなかで，金の動かし手として，自ら金を回転させているかどうかということなのである。

たとえば交易ストアーは今日なら，建てるだけで最低3000*ナ，仕入れにさらに少なくとも500～1000*ナの資金を必要とするが，仮に1年で1000*ナ分の仕入れを1100*ナで売り，建設費用を除いて100*ナが手元に残るだけであったとしても，コーヒー畑から200～300*ナの収入を得た普通の家族からみれば“bisnisman”なのだ。というのは，彼は，建築に3000*ナ，仕入れに1000*ナ，その売り上げで1100*ナ，あわせて5100*ナの金を動かしているからであって，リスクを背負って自ら金を回転させたそのことが，商店の主に“bisnisman”という名誉ある称を受ける資格を与えているのである。

つまり，自分の金をまとまって1つの事業の中に回転させ，全貨幣流通のなかに，自らを分岐点

とする支流をつくり出す。それがニューギニア高地人にとっての“bisnisman”なのである。それを満たすならば，農園主でも，商店主でも，マイクロバスの持ち主であってもよい。ところが，200～300キナのコーヒー収入を米や魚の缶詰や衣服に使ってしまうなら，その男は，金をまとめるどころか散らしてしまったのであり，貨幣流通のなかで何の地位も占めることができなかったのである。貨幣の投資と回転という性格から言えば，“bisnisman”を資本家と呼んでよいのかもしれない。

ニューギニア高地では，貨幣が人々の間に価値の担い手として受け容れられると同時に資本の理念と資本家と呼びうるものが発生した(注4)。

貝貨から貨幣への交替，交易ネットワークの衰退と交易ストアーへの熱狂，そして“bisnis”理念の興隆，これら3つの現象の同時発生は1つの大きなうねりの各々の側面と見るべきものである。

1960年代初頭，ニューギニア高地では，価値の流通のシステムが，大きくうねりを生じたのである。

かつての河床は涸れ，新たな空間に水量豊かな大河として生まれかわったのであり，さらには，河に運ばれて流れる水や土の種類が一変したのである。

だが，変わらぬものは，価値が流れる，あるいはむしろ，価値を流す，ということが，社会の成り立ちと人々の精神を結びつけ，一体のものとして動かしていくというこのメカニズムなのである。これが，ニューギニア高地諸社会の中に，貨幣が，交易ストアーが，そして“bisnis”理念が，1960年代の初めにかくも速やかに確立し，以後今日に至るまで社会の基盤の1つとして定着しきたった理由なのである。

それではなぜ，価値を回転させることがニューギニア高地の人間たちとその社会にとってかくも重要であるのか，そしてそれが，どのような形で社会の他の基盤と絡まりあっているのか，それを次稿以後にわれわれは見る。

（注1） Kelly，前掲報告書。

（注2） Sisley, Peter Norman, “Ialibu Patrol Report No. 8/1965～1966”（タイプ・コピー），ポートモレスビー，National Archives of Papua New Guinea，7ページ参照。

（注3） 同上。

（注4） マックス・ヴェーバーの言う「近代資本主義」ではないかもしれないが，それは間違いなく資本主義と呼びうる何ものかである。これについては後に詳しく論ずることになろう。

（アジア経済研究所地域研究部）

〔付記〕 本論文は筆者がアジア経済研究所1987年度研究会「東南アジア農業の商業化と農村社会構造」の一員として書いたものである。また貝類の同定のため蔵書を貸していただいた豊田由貴夫氏，そしてその和名の同定を手伝っていただいた斎藤成也氏には感謝を捧げたい。